
ペットな私と宇宙のヒトたち（仮）

のーちやる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペットな私と宇宙のヒトタチ（仮）

【Nコード】

N9453X

【作者名】

のーちやる

【あらすじ】

普通に暮らしていた私は、夜にコンビニへ牛乳とプリンの買い物を頼まれて

家路を急いでいたら、夜空に空飛ぶ円盤を発見。

おおー凄いなと立ち止まって、宇宙人ているんだなあと感動していたら謎の光に包まれ拉致された。

そしてついた先は、宇宙人達ばかりの住宅街。宇宙人から見れば発展途上の星地球の人間は、

この宇宙人達の世界では、犬と猫レベル（ペット扱い）だった。

言葉は通じないし、いろいろな宇宙人を見ては驚いたり、気絶する毎日。

宇宙人に拉致される(前書き)

現在抱いている宇宙人の概念を忘れてから
読んでください。

無茶苦茶な宇宙感覚ですので、

これはコメディーだと無理矢理、ご了承ください。

この世界では、地球人はペット。

犬や猫に変換してから、読んで頂けたらと思います。

宇宙人に拉致される

「あ、しまった。牛乳がない。明日の朝、困るわね。」

あ、丁度いいところに。ヤヤコ、コンビニで買ってきてくれない？
冷蔵庫を覗いて、母親は直ぐに真後ろにいた長女の私を見つけて
お財布の準備に取り掛かる。

現在の時刻、夜の7時15分。
秋も過ぎ、外は肌寒く真つ暗な時間帯。

その時間帯に、こちらは今帰宅したばかり。

何も言わないうちに、母親の中では、私はコンビニでお使いが決定
事項になっている。

(うう、絶対に断われないように言っただから)

まあ、確かに牛乳がないと私も困る。

毎朝、我が家は牛乳とかコーヒー、食パン、卵焼きにウィンナー、
サラダという普通の朝食。

家族が全員牛乳を使うので、ないと困る。

私自身は、コーヒーに温めた牛乳を少し入れて、角砂糖1個入れる
のが大好き。

人はそれをカフェオレ砂糖入りと呼ぶ。

「はい、お財布」

渡されたお財布の中身は、千円札1枚。

あのコンビニで買ったいつもの牛乳の値段は198円。
お釣りがある。

「ね、プリンも買っていい？」

「どうぞ」

「やたっ」

プリン1個というご褒美が出来て、ウキウキ気分で家を出る私はなんて安上がり。

コンビニまで片道7分。

目的も簡単な物なので、サツサと会計を済ませて直ぐに店から出た。片道7分とはいえ、人通りが少ない道なので、街灯が頼り。

「この時間帯は、本当に怖いなあ」

たったか歩いていくと、坂道のところで夜空に流れ星。

「うわ、何か願い事しなくちゃ。ええと、ああ、消えないで」

なんてひとりで騒いでいたら、円盤が見えた。

しかも、真上で止まった。

「円盤だあ。本物？凄い、キラキラ光ってる」

宇宙人で、本当にいるんだあなんて、感動しながら上を見上げていた。

ビデオ持っていたら、撮りたかったな。

別に宇宙人信者じゃないけど、宇宙人にちょっと憧れとかあるものね。

大きな丸い物体に見惚れていたら、その円盤から光の柱が降りてきた。

「おや？」

と、思いながら様子を見守っていたところ、次にガクンと身体に衝撃が来て

「え？」

と声が出たところで、光に包まれ空中に引っ張られた。

それは、キレイにグリーンと上へ向かって飛んで行く。

例えるなら、周囲に壁がないクリアなエレベーター。

「え、嫌、嫌」

大きな声で叫んだのに、誰も外へ出て来ない。外に出ている人もこちらに気付かない。

「なんで〜」

どンドン空に留まっている円盤の近くまで来て、恐々下を見ると自宅はおるか、町内が近所がはるか下。

飛行機から地上を見ている感覚だ。

「高い〜、怖すぎる〜」

上空の円盤の真下までくると、丸い穴が開き、入口なのか、その穴へ吸い込まれた。

キュン。

その入口の穴が閉まり、ヤヤコは円盤の中、どこなのか分からないが自分を包んでいた光が消え

床に降ろされた。

周囲を見渡すと、ふよふよと丸い球体が近づいてくる。

『・・・・・・・・』

何かよく分からない言葉らしき物が発せられたかと思うとキンと音をさせ、光る物が自分の周りを囲んだ。

静かになったところで、球体の鉄の鳥籠に自分が入られたことが分かった。

「ええ〜、何故鳥籠？」

やがて何か音がしただけで、後は静寂。

何時間？経った？

「出して〜」

その空間は、全面冷たく感じる銀色の壁のみで、誰も会いに来なくて心細くて、寂しくて体操座りになって泣いてしまった。

ずっと泣き続けたので、そのまま疲れて眠ってしまった。
今日の部活、弓道で精神的に疲れていたし
欠伸をしたら、もう目が虚ろで目が開けられなくなつて
ぐう。

ガクン。と大きな音がして、騒々しい音に目が覚めた。

(何?急に。どこかに着いたのかしら?)

横になっていた身体を起き上がらせると、目を睜った。

入れられた鳥籠の置かれているのは、よく分からない店だ。

店なのだ。

(何、これ。店だよな?)

鳥籠の横では、レジのような物の前に、女性だと思ふ人物が
紙のような物を受け取っては、袋に包んでは相手に何かを渡してい
る。

7

私が立ち上がると、周囲のよく分からない物体やたぶん宇宙人らし
き人達が

いや皆宇宙人だよな?が、

一斉に私を見た。

「.....」

「.....」

何を会話しているのかサツパリ分からないけど、一つ目の青い生き
物の大きいのと

小さいのが近寄ってきて、何か言っている。

大きさは、私はその青い生き物の小さいサイズのと変わらない身長
みたいだ。

そうかと思えば、がたいのある、たぶん2Mはあるかなと思ふ鉄仮

面の物体みたいなのが

じっと見つめてくるわけで、怖くてしゃがみ込んだ。

しゃがみ込んで、自分が何も着ていないことに気付き、両腕で身体を抱きしめる。

顔が真っ赤になった。

「い、嫌々、なんで裸なの〜」

周囲を見渡すが、隠せる服も布も何も無い。

コンビニで買ってきた品物が入っていたビニール袋もない。

恥ずかしくて、蹲っていると、レジらしき場所の横から扉が開き

凄く凄く美形な人物が出てきた。

地球ではありえない美しさだ。

鳥籠の近くまできて、何か話しかけられるが、サッパリ通じない。

「ええと、話わかりません」

こそつと呟くと、私が言葉を発したことで、その美形さんは物凄く
だらし無い顔で喜んだ。

勝手に口パクで、こちらだけの考えで通訳するなら

「やった。しゃべったぞこの子」みたいな。

うう、でも。裸で恥ずかしくて。目をまともになんか会わせられない。

また顔を近づけて何か言っているけど、分からない。

とりあえず、こちらの考えを伝えたいので、身振り手振りで
服を下さいとお願いしてみる。

「・・・？」

「ふ・く」

「・・・？」

伝わってないかなあ。

じつと美形さんの顔を見つめると、彼なのか彼女なのかはつきりしないけど

美形さんは、首を傾げてレジ向こうの扉へ行ってしまった。

「うう、お腹も減ったなあ」

座り込んでいると、また別の変な なめくじみみたいな物体がもちやもちや話しかけてきた。

何を言っているのか、全然分かりません。

この人達、人って言っているのか分からないけど。

皆宇宙人なんだろうなあ。

宇宙人よね。

カチャン。

鍵が開けられる音。

「・・・・・・・・」

真横の鳥籠の扉が開いて、美形さんではなく、先ほどレジをしていた女性なんだろうか

唇が凄く大きく、目が点？の人がこちらを覗いている。

「あの」

「・・・・・・・・」

うわ、早口。物凄く早口で、全然言葉分からない。

私は150センチ。この人は、2Mはあるのでは？と見上げた。

ぐいっと、腕を引かれると籠から出れた。

うわ、出てもいいの？と嬉しそうに笑顔を向けると

その女性？らしき人も笑みを見せる。

手を引かれて、いろいろな袋や箱が置いてある中を通り

さあと手を広げられた場所が、どう見ても風呂。

「風呂？」

私が入ることが出来るくらいの大きな浴槽。

そこには底にお湯が見えた。

「入るの？」

彼女は、私を軽々と持ち上げて、浴槽へそつと降ろす。

温かいお湯の中だけど、膝までしかお湯がない。

ま、いいかとそこへ足を延ばして座り込んだ。

「・・・」

何か頭の上から会話がされたかなと見上げたら

女性？らしき人の手にはスポンジ。

手を動かしているらしく、どんどん泡が増えていく。

石鹸かな？

「もしかして洗うの？」

立ち上がるうとすると、手で制止され、いきなり身体を洗い始めた。くすぐつたいので、辞めると身振りをお願いするが

分からないみたい。

ありとあらゆる場所まで洗い上げられ、

最後に頭を泡だらけにされると、全身にお湯のシャワーを掛けられた。

泡が完全に落ちる頃には、ぜえぜえと肩で息をしていた。物凄く苦しかった。

ひよいと軽く持ち上げられ、隣りに置いてある台の上に座らせ乾いたタオルで身体をくまなく拭いてくれた。

さらにドライヤーで髪を乾かせて、

ピンクのワンピースを着せてくれた。

下着が欲しかったのに、それは用意されていなかった。

裸の上にワンピースのみで、下半身が心もとない。

「下着が欲しい」
身振り手振りで伝えようとするのだけど、首を傾げるだけで通じなかった。

お尻丸見えになるので、物凄く恥ずかしい。
ワンピースは膝下まであるので、余程の姿勢をしなければ
下半身を露出することはないだろうけど、
せめてパンツくらいは欲しいな。

でも、自分の姿ってどんな感じになってるのかな？
凄く気になる。

鏡ないかなと台の上から周囲を見渡していると、
姿見がゴソゴソ何かを探している私を洗った女性らしき人の背後にある。

トンと台から降りて、姿見の前に出た。

「誰ですか？コレ」

顔は確かに私。でも、地毛である茶髪はショートにしていたはずなのに
腰まである。

しかもところどころウェーブがあるので、パーマかけたのかな？
思ってしまった。

いやいや、鳥籠に入れられた時点では、そんなことはしていない。
それに身体。

少しぽっちゃりさんだったのに。
ないよ、皮下脂肪が。
どこの美容整形で？

確かにあの脂肪が取れたら、こうなるだろうなあとは思ってたよ。

夢みたいな体型なんですけど。どうして？
それに胸も。

つるぺたとは言わないけど、Bだったはず。

これは、どう見てもF？

夢みたいだけど、何故こんな姿に？

鏡に向かって首を傾げていると、洗ってくれた女性らしき人が
背後から何か言ってくる。

言葉の意味が分からないので、見上げてニコッと微笑む。

また何か私に向かって言ってから、頭を撫でられた。

何とか言葉を理解出来たらいいのに。

地球人と再会

レジ横に置かれてある鳥籠の中に、また入れられた。

食事は、よく分からない固形物と水。

満腹にはなるけど、美味しさは感じない。

普通に食事がしたいなあ。

自宅でお母さんの作るご飯、食べたい。

どうしてこんなことに、なっちゃったかなあ。

トイレは、何故か3回と決められていて、だが行きたいものは仕方がない。

3回ではなく、とにかくトイレを知らせる為、鳥籠の鉄の柵をガンガン鳴らすと

連れて行ってくれる。

初めは、水で固まるという箱を手渡された。猫トイレを想像して欲しい。

とても出来なくて、宇宙人達が使用しているトイレに走り込んで用を足すと、物凄く褒められた。

それからは、トイレに行けます。

まさしく犬猫扱い。

逃げることも出来ない。

逃げてもどういふ事情の世界なのか把握も出来ず、怖い。

とりあえず、情報を仕入れるとか、言葉の壁を乗り越えないといけないので

店の看板娘をさせてもらってます

店の扉が開くと、ガランガランと不気味な音が鳴り響く。
その音と共に来客が入店。
それを鳥籠から寝転がって見学してます。

背の高さ5Mとか、犬耳があるとか、顔が不気味とか、浮いている、
羽根がある等は

この数日で慣れた。

なめくじ顔とか、どこに目がついているのか分からない生物も見た。
宇宙人で、いろんな人がいるのね。

感心していたら、昼過ぎに凄い豪華ドレスをまとった

セレブと思うような大きなタコ女が来店した。

タコだ。

凄いタコだ。足は8本だ。

なんて見ていたら、首輪を付けたタキシードを着た
容姿が地球人に似ていると思う人を連れていた。

茶髪だけど、鼻筋が通っていて、映画に出てきそうなイケメン。

スタイルももちろん良くて、格好良い。

首輪の先には鎖。タコ女がその先を持っている。

ペットでいうところの犬を思い出す。

でも、何故タキシードなんだろう？

タコ女の趣味？

「地球人？」

と、声を掛けたら、相手も気が付いて手を振ってくれる。

「へえ、珍しく地球人がいるって飼い主が騒いでいたから

ここへ連れてきてくれたわけだが。君なんだ」

彼は、ヨーロッパ系の人間で、話が通じて会話をしてみたら
私の母国大好きな外人だった。

「言葉通じますね」

「君の母国好きでしたから」

私達が会話を始めると、大きなタコ女とレジの前の女？らしき店員は高い位置から、私達を見下ろしている。

「何？見られてる？」

私が怯えると、彼は苦笑する。

「ああ、君を買うかどうかを判断しているのさ」

「買う？」

その意味を私は分かっていない。

「そうだよ。ここはペットショップと違法商品を扱う店。

発展途上の星の人間とかペットになりそうな生き物を星間法を無視して

違法拉致して販売している。

君はその違法拉致で違法取引されたんだ」

彼が、説明するたびに、ポロポロ涙が零れる。

ハンカチは2人とも持っていないこともあり、

彼は鳥籠の鉄の柵近くの私へ腕を伸ばし、親指で拭ってくれる。

「僕たちの世界にもあった密猟者という言葉が当て嵌まる。

この店が密猟組織から君を買ひ、ここで店頭販売しているのだろうか。な。

この店から昨日、飼い主へ地球人を入荷した連絡が来たんだ。

今、そこにいる僕の飼い主が、ここへ来たのも

買うかどうか、君を観察しているところさ」

上を見上げると、ピンクのタコ女に見つめられている。

「それで、いつここへ」

「数日前。買い物物の途中で円盤が空を飛んでいるのを見てたら拉致

された」

ここまでの経緯を手短に話すと、彼はそうかと頷いてくれる。

「僕は、ここへ連れてこられたのは、高校生の時で、かれこれ5年前になる。」

言葉は通じないまま、この店で売られて。

今の飼い主に当時飼われたんだよ」

「飼い主がタコ女。凄い経験だよ。私は、今16歳」

「そう。僕が捕獲された年齢と同じだ」

そういえばおかしいのだけど、今までの疑問を口にする、彼は分かる範囲で説明してくれる。

「ああ、身体や顔、髪形のこと？科学が発展してるんだよ。たぶん、君を違法拉致した密漁者組織がしたんだ。

科学が凄いよ。医療関連は見ていて驚かされた。

僕も実際見た時は、かなり驚いたさ。

円盤に乗せられてから、睡眠ガスで眠らされて

その間に、身体を調べられて、良い値で売れるように、身体の細胞を作り変えられたんだよ」

地球人なら、ぜひ手に入れたい技術さ。

「へ。これ、手術したわけではなく？」

「そ。何か全身に黄色の光を浴びせると、それを起動した奴が、細胞を動かして

好みに変えられる。だから、鏡見て驚くよ」

どこが変わったの？

と、聞かれたので、髪形とか脂肪が減ったこととか、胸の話をする

じつと視線が胸に移る。

「胸が？」

「本当は、こんなに大きくなかったの。もう少し小さかった。

ブラもサイズがBだった。今はどう見てもF」

じい、と視線が胸で止まったまま。

今は裸に生地の薄いワンピース着ているだけなので、150センチの私より背が高い彼からは

胸元やワンピース越しから形とかがしつかりと見えているだろう。

今までそんなに胸を見られたことがないので、物凄く恥ずかしい。

「あ、え〜と。名前は？」

「あ、僕？ラーティ。このタコ飼い主には、ラータって呼ばれてる」

「ラーティね。私は、ヤココなんだけど、言いくいからヤヤコで。

ラーティは、変わったところはあるの？」

整形しなくても格好良い。

「鼻。鼻が高くなって、顔の配置が変わった」

「イケメンだよな」

私がまじまじと見つめると、彼はくくくと笑う。

「昔の僕は、顔のパーツはそれぞれ良い具合なんだけど。鼻がそれを台無しにしてたんだ。

それを治されてた」

こんな感じと、手振りで教えてもらう。

爽やかで楽しい人だなと思っていたら、彼は急に真剣な顔つきになる。

「ところで、今僕たちは話をする時間を与えられているけど、意味分かる？」

そこで、彼が上を指さす。

その指を見ながら視線を上へ向けると、タコ女と女だと思つ店員の2人の視線があつた。

「え？買うという話？」

「そう。僕が君を気に入るかを見ているところ」

「貴方が私を？」

「今日は、僕にお嫁さんを見つける為に、飼い主と来ているんだ」

お嫁さん？

お嫁さんで、私を？

一瞬怯んだ私に、鉄の鳥籠の柵に手を掛け

「僕の妻になつてくれるなら、君をここから出してあげられる」

「貴方は、それでいいの？」

彼は苦笑する。

「この世界に来て、もう5年だ。ずっと地球人としてはひとり。

確かにひとりではないけど、タコ女の他のペットは他の星の宇宙人。これから地球人に会えるのはいつになるか分からない。

この飼い主も今後会わせてくれるかも分からない。

せつかく君のような可愛い女の子に出会えた。

僕ではダメかい？

飼い主はタコ女だけど、僕と一緒に来ないか？」

「.....」

「.....」

頭の上の方で、何か早口の会話が交わされ、意味不明なんだけど。鳥籠の横の扉を店員が開けてくれた。

扉が開いて、私が外へ出ると

待っていた彼は、手を広げて近寄ってきて抱きしめてくれる。

「ちょ、ちょっと」

「僕がこうすることで、気に入ったと飼い主に伝われば君は僕と一緒にに行ける」

「で、でも」

「奥さんになるかどうかは後回しで、まずは外へ出ないと始まらないよ」

店の中でいつまでも鳥籠の中にいるよりも、外へ出てみたい。私は頷き、彼の手を掴んだ。

タコ女の家（前書き）

R15らしき文章がいくつか。

タコ女の家

私が彼の手を掴んだことで、タコ女は私を購入決定。直ぐにレジの女らしき店員は、タコ女と会話を始め私を彼の隣りに立たせた。

新しい首輪で色違いを2つ、私に似合いそうなワンピースを2着購入した。

店員が私にその色違いのピンク系の首輪を嵌め、鎖に通した。もう1つ青色系の首輪は、新しく彼に付けられた。

「・・・」

タコ女は嬉しそうに何か言っているが、本当に分からなくて。ただただ愛想を振りまくしかなかった。

店を出ることになり、ガランガランと不気味な音を立てて扉が開く。

隣りに立っていたラーターイは、手を握ってくれて先を行くタコ女の後ろから2人で店を出た。

店を出ると、ファンタジーと未来を混ぜ込んだ世界だ。

今までの店の周辺は、メルヘンかと思うような野原の中にある。

そこを通り過ぎると、急に道路や近代的な建物が姿を現す。

空中を走る車。タイヤはない。

タコ女の後ろを着いて行くと、未来型パーキングに着いた。

周囲の車はない。2つ出入り口があるだけ。

タコ女が車が出てくるのを待っていると、別の通りから巨大なイカ男が歩いてきた。

ゴン。という響くような音がして、扉が左右に開けられると、物凄い大きな車。

タイヤもドアも大きくて、高さがあり、どうやって乗っているのかわからない。

タコ女に車の扉が開けられると、ラーティが私を横抱きにして後部座席に押し入れてくれた。

飛び乗る形だ。

その隣の席に、彼は弾みを付けて飛び乗り座る。

運転席には、イカ男。

助手席にタコ女は座った。

運転手がいるなんて凄いなと思っていたら、タコ女の夫で。イカ男だった。

車はエンジンが掛かると、空中に浮かび、パーキングから飛び立った。

車が空を飛ぶ世界なんだと思うと、何が燃料でどういう構造なのか凄く気になった。

窓から見る景色は、初めて見るものばかりで、「凄い、凄い」と声を出していた。

車が停まり、車から降り、鉄筋系の建物の中へ歩いて行く。

エレベーターを乗り、着いた先がタコ女の家だった。

ワンフロアがタコ女夫婦の家。

家に入ってから、トイレがどこだとか、あちこちラーティに教えられた。

「広いなあ。我が家は一戸建てだったけど。ここはそれよりも広い」

「僕等の部屋は、こっちだよ」

「僕等？」

ラーティに連れられて来た部屋、それはペットだけの部屋だった。

『いらっしやい、新入りさん』

何か言っているけど、私には分からなかった。

部屋には、へびもどきとか猫とかフクロウのような鳥という先住者がいた。

「こんにちは、地球人でヤヤコです。よろしくお願ひします」
頭を下げると、彼らは歓迎してくれた。

『ようやくラーティにお嫁さんが決まったのか』

『良かったな、ラーティ』

と、早速ラーティは心のこもったお祝いの言葉をかけられているらしい。

私には会話の内容は、分からないけど。

彼は、彼らとは会話が出来るとのことで、羨ましい。

黄緑色のへびもどきさんは、ラバンサ。

猫は、ハスタラ星人のウエンサート。

フクロウは、ハッシー。

部屋の中には、個室がそれぞれあり、その1室がラーティと私の部屋に

なるそうです。

皆が集っている場所がリビング12畳、部屋は4つで、1部屋8畳。凄

い。
ベランダに出ると、マンション群。

下を見ると、道路や公園、宇宙人が歩いている。

もう頭がパニックになってくるよ。

ずっと夢を見ているのじゃないかと思うほど、環境が違つ。

後ろ手にある扉が開き、タコ女が何か言っている。

ラーティを始め、皆が部屋を出ようとする。

「どこへ行くの？」

「家族の団欒。夕食を食べて、リビングで皆で寛ぐんだよ」

ラーティは、私の手を握ると、一緒に連れて行ってくれた。

夕食は、地球人の2人には、

店が出されたものと同じ固形の物を食べ、水を飲む。

他のペット達もそれぞれ与えられた食事を食べた。

「ねえ、この食事はずっと続くのかな？」

「たぶん。たまにメーカーの違うものを試しにくれたことあるけど。

固形は変わらない」

「犬の気持ちがよく分かる」

「ははは、僕は犬も猫も飼ったことがなくて、気持ちは分からないけど。

対等には扱ってはもらえてないね」

タコ女とイカ男が、長いソファで寛いでTVを見ているので

そのソファの隅に2人で並んで座った。

基本は、私達ペットは家の中では自由だ。

画面は、宇宙人が何人も出てきて、何やら話をして

身振り手振りでしか分からないけど、恋愛ドラマかな？と想像しつ

つ見ている。

ついでに、言葉が分かるかといいなあと考えながら。

それなのに。

「ちよっと、離れてよ」

べつたりとラーティはくつついてくる。
手が腰を回ったので、抓つてやるが、効果なし。
この家に戻ってから、かなりスキンシップが激しい。
手をいつまでも繋いでいたり、頭をなでたり。
こちらが困った顔をさせても、にこにここと笑顔だ。

私が困っていると、へびもどきが、にゆるりと横から現れ、
驚いて顔を引くと頭の中で声が聞こえた。

「ラーティの奴、ずっとお嫁さんが欲しかったんだよ。
付き合つてやつてくれよ」

驚いてへびもどきを凝視すると、どこかへ行つてしまった。

「今の何？頭の中で声が」

ラーティへ顔を向けると

「ああ、彼は思念で言葉を送ることが出来るんだ」
と、答えてくれた。

へびもどきは、外に野生とかどこかの家に、彼女が何匹もいるらしい。

ラーティは、苦笑まじりで、へびもどきの性格を説明してくれて
私は大人しく聞いていた。

私達が仲良く会話をしている姿を、タコ女とイカ男はじつと見てい
る。

その視線に気が付いて、ラーティに尋ねると、彼は顔を真っ赤にさ
せた。

「どうしたの？」

「その、か、彼らは僕と君の子が欲しいんだよ」

男性とお付き合いもしたことがなく

手も繋いだことのない

(先ほど、繋ぎましたが)

全くの何も経験のない16歳の娘には

お付き合い、恋人、婚約、結婚を飛び越え

言われたのが、子供が欲しい という言葉でしたので

心臓がその衝撃に耐えきれなくて

ええ、もちろん気を失いました。

「わわ、ヤヤコ。すっかり」

登場人物

地球人

ヤヤコ

本名 桃沢^{モモザワ} 野由子^{ヤユコ} 16歳。 高校生

地球人 茶髪 黒い瞳 身長150センチ

ラーテイ/ラータ

ラータは、飼い主家族が呼ぶ名前

本名 ラーティス・セラ・グリモンド 23歳

地球人 茶髪 紺色の瞳 身長170センチ

宇宙人

タコ女

本名 ハーバス・シャロツテ 128歳 セレブ 経営者

パシワラ星人 3Mのピンクのタコを想像して下さい。

イカ男の妻

イカ男

本名 ラバラバ・シャロツテ 156歳 セレブ オーナー

ローロー星人 5Mの白いイカを想像して下さい。

タコ女の夫

タコ女のペット達

黄緑色のへびもどき
猫もどき

バシユワン星出身
ハスタラ星人

ラバンサ
ウェンサ

ー
ト

フクロウもどきの鳥
バシユワン星出身

ハッシー

お付き合いしてみる(前書き)

ラーティは、5年もの間待っていた。

お付き合いしてみる

気絶し、介抱されて無事初日は終わり、2日目。

朝は、固形の食べ物に水が出て、何もすることもなく窓から景色を見ていた。

本当に暇で、他のペット達は何をしているのかと、部屋を見回すといなかった。

へびもどきは、外へ散歩。

ペットなのに、勝手に部屋を抜け出していいのか？

たくさんいると聞いている彼女に毎日会いに行っていると聞いた。

フクロウ系の鳥は、自室で寝ている。夕刻から活動する体質らしい。奥さんは、今ペット病院で入院中。

何でも飛ばたいいている時に、柱にぶつかり、羽根を傷めたそうだ。

そのうち会えるだろう。

猫系。やはりこちらも部屋を抜け出して、いない。

この猫もどきも彼女があちこちにいる。

この星では、よく見かける種族らしい。

皆パートナーというか、恋をしつかり出来る同種族がこの星にはいる。

それなのに、5年もの間、ラーティは1人地球人として、この家で過ごしていた。

確かに楽しいけれど、彼女もしくは奥さん、又はパートナーとなる同種族の女性を

待っていた。

一応、地球人を捕獲することは星間法では禁止されている。今、地球人がいるということは、密猟されてきたか、昔の密猟で来ているか等だ。

最初に地球という星が発見されたのは、1千年前だというから驚きだ。

ラーティが、今までいろいろ調べていたことを聞いて捕獲された人がいて、宇宙人と一緒に生活した人がいることにさらに驚きだ。

宇宙人達は、成人したら大きい体格、身長が多いので、可愛くて小さな地球人は人気があるらしい。

未だに、もしも地球人が捕獲出来たら、欲しがるセレブ達がいるようだ。

タコ女もそのひとり。

宇宙で人口が増えないのは、寿命が80年くらいと短いことと

宇宙でかかる病気に弱いそうだ。

地球とは環境も全て未知の世界。

宇宙人達もどうにも出来ないらしい。

そんな話を聞いて、私はラーティと直ぐに出会えて幸せなんだろうかと

思えてくる。

同じ地球人は、彼1人しかない。

ラーティが、タコ女やイカ男のいるリビングにいる頃、へビもどきが頭の中に直接話しかけてきて、

私とラーティが上手くいくように願っているそうだ。

イケメン男性で、性格も穏やか。初めて会ってから、いろいろ話をしてるが嫌いではない。

むしろ、好きになりかけている。いや、好きなんだと思う。

でも、16年間。恋人とか誰もいなかった私は、どうしていいのか
実のところ分からないのだ。

戸惑っているのは、私だけでなく、ラーティも同じじゃないかと思う。

ラーティは、今日もタコ女に付き合っつて、リビングでTVを見てい
る。

ちなみにイカ男は、仕事で外出なのだそうだ。これもラーティ情報。
そして私は、暇だ。

ぼんやり空を眺めていたら、ペット部屋の扉が開いた。

「ヤヤコ」

ラーティが、上気しながら笑顔で戻ってきた。

「あれ？何かいい事あった？」

鼻をくすぐる良い匂いがする。何の匂いだろう？

「お酒。一昨年辺りから、タコ女が試しに料理酒をたまにくれるん
だ」

「酔ってる？」

「うん。ヤヤコ。子供はまだ早いかもしれないけど。」

僕と付き合っつてみてよ。友達以上で」

今の地球の付き合いって、どんな感じなのかなあ？と

思っていることを話しながら、私は彼の腕の中に閉じ込められた。

「ずっと待っつてたんだ。僕と同じ地球人の女性と出会えるのを」
誰でもいいということはない。

僕と一緒に過ごしてくれる女性でないと。

この日から、私とラーティの距離は近づいている。
スキンシップも受け入れられるようになる。
毎日ぎゅっと抱きついて、
眠る時は一緒に。
ハグが多いなあ。

数日後には、それがもう少し増えて
おでこや頬にキスが増えた。

甘々で、砂を吐き出しそうなんだけど。

これが、恋なのかなあと思っていたら、最近タコ女やイカ男が
家政婦ドラマ「家政婦は見〇」のように、こっそり覗いて様子を
見ているのだ。

「あれは、どういうことなの？」

今もペット部屋で、ペット用のソファで2人で仲良く並んで座って
ゴロゴロしているところを

ドアが少し開けられて、大きな巨体が2つこちらを見ている。

「飼い主は、2人が仲良くしているところを見たいんだよ」

「そうなの？」

いきなりソファの上で、ラーティが押し掛かってくると
扉から息を呑んだ音が。

「ほらね」

彼らのビデオカメラの作動する音が聞こえてきた。

イカ男が吸盤にくっつけて、レンズをこちらに向けている。
タコ女が何やら言っているが、まだ言葉が分からない。

少し言葉が理解出来ているラーティは、小さく笑う。

「仲良くしているところを、撮りたいみたい」

「わわわ、嫌〜っ」

ラーティの身体を避けると、顔ばかりか耳まで赤くさせて
恥ずかしいやら、照れるやらで、ぎこちなく歩き、個室に1人で入
って扉を閉めた。

背後では、きつと残念とか言っているようなタコ夫婦の会話が聞
こえてきて

恥ずかしくなって、シーツの中でジタバタしました。

一緒にお風呂

すっかり日が暮れた。夜空にお月さまみたいな星が5つ並んで見える。

不思議だ。

カチャリと音がして、猫もどきがサツパリして戻ってきた。

「いい香り〜」

どうやらお風呂に入れられたようだ。

猫もどきなのに、お風呂好き。地球の猫は、水嫌いだから、ちょっとびっくり。

綺麗になったところで、また外へこっそりと抜け出し、夜の闇に消えた。

「せっかくお風呂に入ったのに」

わざわざ夜に行くことないのになと思う私に、猫もどきは知らん顔。

タコ女が扉の前で溜息を吐きつつ、私とラーティを持ち上げた。

「あれ？私もお風呂？」

「そつみたいだね」

ラーティもお風呂が好きらしく、喜んでいる。

タコ女に連れられて行ったお風呂は、広くて天井が高い。

浴室前で、ガラス越しから覗いて驚いた。

まあ、タコ女もイカ男も背が高く大きいから仕方がないけど、広い。

普通に浴槽に入ると溺れると思う。高くてひとりでは、登れない浴槽だけ。

大丈夫かしら？

そんな事を考えつつ、ワンピースを吸盤が器用に脱がせてくれる。

「……………」

タコ女が何か言っているが、分からないので、とりあえず、溺れないように

お風呂場に足を踏み入れても動き回らないように待っていた。

石鹸も大きいなあと触っていたら、急に持ち上げられ、

ペット用のお風呂、たらいの中に入れられた。

お湯を身体に掛けられ、温かいなあと足を伸ばしていたら、

「いい湯だね」

と、笑顔でラーティが足を入れてきた。

ニコニコ笑顔で。

「え？何故ラーティが？」

「僕も一緒にお風呂入るためだよ」

タコ女が、たらいの中へお湯を注ぎ入れる。

いつの間にか、肩までお湯が張られていた。

「どうして？」

「どうしてって、タコ女が俺の服も脱がしてくれたよ。今、一緒にお風呂場へ入って来たところ」

私達の横では、タコ女が今から彼らの浴槽へ入るところだ。

バシャアン。

タコがお湯の中に入って、茹っている。

「茹ったタコ？」

「ははは、まあ宇宙人だから大丈夫みたいだね」

「宇宙人もお風呂入るんだね。気持ち良さそう」

「それなんだけどね。お風呂好きな宇宙人はいるみたい。TVで温

泉シリーズやってたよ」

「へえ、温泉」

なんて、仲良く会話をしている場合ではない。これはいわゆる混浴状態。

たらいの中、男女が肩を並べてくっついていて、恥ずかしいじゃない？

「混浴だね」

「ラァーテイ、嬉しそうだね」

「うん。僕、地球人の女性と混浴は初めて」

隠すものがないから、お互いが全身丸見え。

手で隠せるものではない。

「凄いな。バストサイズがBからFかあ。そのサイズがFなんだね」
見ているところがやはり胸。お湯に浮いてる感じだものね。

自分で見ても、大きくて驚き。

Bの頃は、お椀サイズで、水着着てもそれほど見られることもなかった。

大きくなったことで、ここ数日少し苦労していることがある。

肩が痛い。胸の重力が結構あるのだ。前かがみな感じになるので、背筋を伸ばそうと

して、肩が疲れる。胸を固定出来れば、まだ楽だと思うので、ブラが欲しい。

ブラがないと普段から揺れるので、それも苦痛だ。

少し走ろうにも固定しているブラがないと、胸がぶつかる。胸の揺れで、胸と身体の

付け根が痛い。

そんな苦労も知らず、彼はにっこりと笑顔で、白くてモチモチ感たっぷりのメロンを眺めている。

ジロリと視線を送ると、肩を竦めて苦笑している。

「仕方ないよ。僕は男だからね」

頬を赤らめているイケメンもいいかもと思いつながら、

「そうですね」

と返しておきつつ、顔を手で押しやり、見ないように反対側へ向けさせた。

風呂場で欲情されたら、タコ女が見るに決まっている。

絶対に阻止しなければ。

ペットショップの時よりも、自然に入れて気持ちよくて眠気が誘う。舟をこいでいたはずだ。覚えがないが。

あまりにも自分、無防備過ぎた。

さわさわと何かが身体に触れてくるので、ようやく眠気が醒めてきた。

ハッと気付くと、ラーティの膝の上に乗って、彼の肩に後頭部を乗せて寝ていたようだ。

さわさわしていたのは、彼の手が身体中を擦っていたからだと分かった。

水中に視線を落とすと、太ももに触れていた手が、腰や胸の辺りへと動き回っている。

「ラ、ラーティ」

「ん？気持ちいいだろ？」

その言葉に赤面しながら、天井を見上げてタコ女とイカ男の視線とぶつかった。

「イカ男がいる」

「うん。君が眠っている時に、入って来たよ」

「手に持っているのは？」

「ははは、ビデオカメラだね」

バシャバシャとお湯しぶきを上げて、イカ男のビデオカメラに向かってお湯を放つ。

イカ男は慌てて、ビデオカメラを上へ持ち上げ避難させた。

タコ女は、笑っている。

「ラーティ。撮影されてるなら、早く教えてよ」

「ははは」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

実は、彼らはヤヤコとラーティが、仲良く2人で行くところをよく撮っている。

それをリビングで仲良く夫婦で見ているので

ラーティは自分も付き合っつて、見ている。

自分達の記録を見るのが楽しみだということは、ヤヤコには話していない。

さらに、彼らは写真も撮っている。

宇宙人の写真は、地球の写真と異なり、空中に画像を浮かび上げさせるという

3Dのような立体感がある。

ここへ到着したばかりのヤヤコの全身。

寝ている姿とか、可愛い姿勢のものとかイカ男が隠れて撮っている。ヤヤコは知らないが、たらいのお風呂で寝てしまって沈みかけたところをタコ女が

慌てて助け、イカ男がその裸体をカメラに収めたので

今日の夜には、リビングで夫婦で今日の地球人鑑賞会で見るだろうから
楽しみだ。

ヤヤコは、身体を拭かれ、髪もタコ女に乾かせてもらい、パジャマ
ドレスを着せさせられると

走ってペット部屋の個室へ逃げた。

そのパジャマドレスは、可愛いピンクのデザインだが

太ももまでしか生地がなく、下着がないことで

いろいろと見えてしまうからだ。

下着が欲しいと伝えられないもどかしさ。

面白い服は、どこで手に入れるのか分からないが、タコ女はヤヤコ
にいろいろな服を買い

着せ替えを楽しんでいる様子。

タコ女は、イカ男に

「地球人の女の子は、恥ずかしがり屋さんね」と言っていたことは
内緒だ。

きつとまたヤヤコは恥ずかしくて、シーツを被って、ジタバタする
だろうから。

文字と言葉を覚えよう

どうしても私は言葉を覚えたい。
会話をしたい。

「どうしたんだ？そんなに力んで。トイレなら早く」
女子高校生に向かって、よくも恥ずかしいセリフを。
怒りたいのを我慢して。

「違う。ラーティ。私は言葉を覚えたいの。会話したいの」
ええ、力説しますとも。飼い主に話をしたいの。
宇宙人達とも。

「ああ・・・もしかして下着？」
ラーティは、ちらりと私のワンピースの下半身へ視線を送る。
「そうよ」

ラーティは、下着は履いてないけど、ズボンと半袖シャツで隠せる
けど
薄手のワンピースは、しかも太ももまでしかスカート丈がないから
物凄く、恥ずかしい。

まだこの家から出る^{マンション}ことがないからいいものの、
どこか外へ行くのに、この姿は流石に嫌。

この星に来てから、下着を貰えない。
下着というものが存在しないのかと思っていたら、TVや着ている
人が歩いているのを
ベランダから見ることで知った。

いろいろな姿 形をした宇宙人がいっぱい歩いたり、泳いでい
たりしている。

そこで、自分なりに考えたのだが、言葉が通じないことが一番ダメ。通じれば、私も会話ができる。

ラーティは、5年この星にいたのだが、聞くのはなんとかだが話すことは無理だと言う。

「どうして？」

「発音が凄く難しい。どれが共通語になるのかが、まず分からない。誰かに教わるしかないが、教えてくれる人を自分で探すことも出来ない」

TVでは、いろいろな言語が飛び交っていて、かなり混乱してくるので

1つに絞って聞いて、タコ女とイカ男の言葉を覚えたいらしい。

「彼らの言葉の意味は分かる。でも、発音が分からない」

それに尽きる。

確かに、発音は難しい。

何言っているのかサッパリ。聞き取りにくいし、同じ言葉を使っているつもりだけど

舌がついていかない。速さについていけない。

「タコ女に聞いてみよう」

ラーティは、言語学習が出来ないか飼い主本人に聞いてみる提案をした。

「今まで聞くことしなかったの？」

「一応試してはいるけど、中々通じないからね」

言葉の壁があると、どうも地球人という人間なのに。

背が高く大きな彼らには、自分達地球人は身長差から言っても、犬猫扱いなのだ。

「きつと彼らには、わんわんとかニャーニャーと、聞こえているかなあと思う」

身振り手振りでしたけど通じないので、落ち込んだこともあるらしい。

「でも、ラーティは、タコ女達の会話の内容は理解してたっただよだね？」

「そうだよ」

「うう。早く分かっていたら、通訳してもらったのに」

「ははは。早口だから、結構難しいんだこれが」

確かに早口。

今更だけど、通訳者って凄いかも。

次の日の昼間。

リビングで寛いでいるタコ女発見。今日は、出掛けないようだ。

早速、2人でソファアに向かった。

「.....」

何を言っているのか分からないが、タコ女が私達2人に気付いて足2本を器用に動かして、2人を抱き上げて自分の座っているソファアへ降ろす。

「.....」

なんだか嬉しそうに何かを言っているけど、早口。

「どうしたの？2人ともと、言ってる」

ラーティが通訳。

「ラーティ、お願い」

彼は頷いて、タコ女に話をしてみる。

早口は無理だが、ゆっくりと挑戦してみる。

タコ女は、なんと耳を傾けて聞いている。

「言葉が分かるようになりたい。言葉を話せるように教えて欲しい」

タコ足が4本だけうにようによ。

彼女は考えているようだ。

私達はじつと彼女を見つめた。

「.....」

「え？何」

私はラーティを突く。

「え、ああ。会話ができるの？地球人が？と言っている」

2人で頷くと。

彼女は、言葉を理解している私達に驚いた。

早速、ソファアから身体を起こすと、別の部屋へ入って行った。

私もラーティもタコ女の行動をじつと見ている。

彼女は、直ぐになにやらいろいろ持つてきて、私達の前で広げた。

それは、私達には大きいけれど、A4サイズの折り畳み携帯のようなもの。

タコ足がその携帯のようなものを広げ、いくつかあるボタンを器用に押した。

タコ女も同じ物を持っている。

「聞こえる？」

そんな声が携帯から聞こえてきた。

「聞こえます」

「あら？本当に会話ができるのね。地球人は発展途上で服も着てい

ない

野蛮な星と言われているから。

見目が良くて、ペットとしか扱えないと聞いていたのに」

地球人のイメージって。

もしかして、旧石器時代の人間のイメージが伝わっているのかしら。ラティと顔を見合わせると、タコ女はどんどん話を続けてくる。

「でも、嬉しいわ。ペットと会話出来るなんて。この機械は携帯用言語修復装置よ。いわゆるどこの星の会話も共通言語にするものよ」

凄い。凄い機械だ。でも、大きい。

「大きい？そうね。これのもっと小さな物があるけど、小さな宇宙人向きだから

私は持っていないけど。取り寄せるわ。毎日会話が楽しめるなんてこれから楽しくなるわ」

タコ女はご機嫌だ。

「それで、下着が欲しいのですけど」

こっそりと、小さな声で伝えると、タコ女は驚いた。

「え？地球人は下着を知ってるの？

何も履かずに服を着ていると聞いてるわ」

よくよく聞いて見ると、地球調査が1000年前にあり、そのデータで地球人を

知ったということや

密猟で拉致された話をする、驚かれた。

「ええ、地球人を攫ってきたの？私、知らなかったわ。

ペットシヨップがどうやって仕入れていたかまでは、聞いてなかったわ」

「それで、下着を」

私は、ワンピースの下には何も着ていないことを訴えた。

「胸が大きいし、お尻見えてしまうのは、恥ずかしいことだったのね。」

地球人の女の子は、皆下着を付けずに、服もワンピースしか着ないと聞いていたから」

（どんなイメージなのよ。下着を付けていない時代だから、やはり旧石器時代？）

それでは、ラーティは何故タキシード着てたんだろ？

「ああ。地球の男の子でもこの星の服が似合うかなと思って着せてみたの。」

あれは、タキシードという名ではなく、

恋人に正式に結婚の申し込みをする時に着るとい

昔ながらの風習のものよ。

貴女にもいろいろ買ってあるのよ」

箱を一つ持ってきたと思ったら、イベントに参加する用ドレスとかどこどこに行く時に着る服とか、何着も出てくる。

「凄い」

（でも、下着がない）

「下着は、明日買いに行きましょうね」

「本当？うわ、嬉しい」

ピョンピョンジャンプして喜ぶと、タコ女も嬉しそうだ。

「ところで、自己紹介しましょうか？私はパシワラ星出身で、ハイバス・シャロットテ。」

よろしくね。夫は、ローロー星人で、ラバラバ・シャロットテ。

今住んでいるこの星は、パシユワン星。

ペット仲間のラバンサとハッシーがこの星の住人よ」

誰の事かしら？
首を傾げると。

「え？貴方たち、ペット仲間でも会話が通じないの？知らなかったわ」

と、タコ女 いえ、ハーバスさんは、その点にも驚いていた。

「この機械で、皆と話しが出来ないかしら」

「どうかしら？知能がある動物なら、会話出来るときいているけど。ハスタラ星出身のウエンサートなら、なんとか出来そうな気がするわね。」

他の2匹はどうかしら？」

2人は、携帯でペット仲間と会話出来るか試そうと話した。

「ええ、でも。きちんと教えましょうね。機械に頼っていると、壊れたり

失くした時、困りますからね。文字はどうなの？」

「全然、分かりません」

「それでは、早速文字を教えましょう」

タコ女は、ウキウキしながら準備をしに部屋を出て行った。
余程暇だったようだ。

お騒がせ、訪問者たち

ダンダ〜ン。遠くの方から何度も響いて聞こえてくる。

「ね、あの音何？」

初めて聞く煩い音に、私は起こされてムツとしていた。

「来客が来たんだらう。あれは、地球でいうところのチャイムだよ」
まだ寝ていようと、眠たそうにラーティは欠伸をしていたが
また眠りについてしまった。

「あ、寝ちゃったの？」

身体を揺すが起きない。

私の方は、目が覚めてしまい、起きたついでに水を飲もうとベッド
から降りた。

ドアを開けようとして、ドアノブに手を掛けたところで。
ガンガンガンガン。

「な、何？」

扉の向こう側で、誰かが蹴っている。

『ちよつと、早く開けないさいよ。ラーティ』

あ、言葉が分かる。

でも、なんだろう？ラーティの知り合い？

女性の声が聞こえる。しかも、言葉使い怖い。
そのうち叩き方が激しくなって、怖くなった。

「ラーティ、怖いよ。起きて」

身体を揺ると、彼は欠伸をしつつ目を開けた。

「ん？」

と、寝ぼけた声を出したが

「てめえ、ラーティ開ける」

という暴言を聞いて、ヒツと声を出したかと思うと、私の腰にへばりつく。

「ちよつと、ラーティ。何？」

「カマキリが来た」

「カマキリ？」

「マーキュリ星人だよ」

ええと。マーキュリ星人て？

不思議そうな顔をさせると、彼は3年前に出会ったというマーキュリ星人の話を

始めた。

見た目は、地球人に似ているが、内容はカマキリ。

夫になった者を食べてしまう種族。

双方が発情期になると、男側は危険だが子孫を残す為に会いに来るんだ。

だが、朝になると女性が男を食べる習慣があるから、男は即逃げる。最近、あちこちの星々に渡るようになり、捕獲されてペットとして飼う者も出て来た。

「ペット？」

「そう、僕等のように、その星は文明が遅れている。まだ、宇宙船すらない。

その美しい外見に惑わされて飼うものの、男を食べる習性に飼う男性はまずいない。飼うのは、護衛用に女性が多い。

しかも、最近の子孫を残すのに同族ばかりでなく、別の種族にも手を出しているから
ハーフも増えている」

どうやら、ラーティは、外見地球人に似ている彼らを結婚相手にタコ女が

1度連れて来たことがあるらしい。

マーキュリ星人の習性を知って、慌てて辞めたそうだがタコ女の友人が飼っている。

「そのタコ女の友人もタコ？」

「いや、イカ。実はイカ男の友人のひとり」

「イカ女？」

「そう。イカ男の元カノ。今もイカ男とヨリを戻したい雰囲気ありありで

よく家を訪問してはタコ女をいじめている」

珍しい地球人をペットにしたことで、横取りしようと企んでいてマーキュリ星人を使って拉致しようとしたことを話してくれた。

「タコ女大丈夫なの？」

「ああ、いじめられていることに気付いていない。イカの嫌味がタコではよく分かっていない」

とりあえず。イカ女はおいといて、そのカマキリなマーキュリ星人に要注意なわけだ。

「怖い星人ね。あの扉を開けても大丈夫？」

「女性には害はない。君は大丈夫。問題は、男性の僕とか他の雄のペット達」

「ああ、そうか。食べるんだ」

「発情期にね」

普段は、プロレスラーのような性格の美人でスタイルがいい。

でも、性質的にはカマキリのようなんだ

と、ラーティは嫌そうに話をする。

今度は、大きな音とタコ女の声が聞こえて、扉をノックされた。

「……………」

タコ女は扉を開けて、マーキュリ星人をイカ女に渡し、私とラーテイの様子を伺った。

私とラーテイは、タコ女に持ちあげられる。

イカ女が何か言っているが、タコ女は私達をイイコイイコしてくれる。

そのまま2人を抱き上げると、何か言っているイカ女と一緒にリビングへと向かった。

イカ女は、ピンクのイカで、化粧が派手だ。

マーキュリ星人を腕に2人抱えている。

「ヤヤコ。やはり夫の姿が見えないから、食べられたんだよ」

「女性と女の子がいるよ」

そんな地球人の会話に、ニュアンスは違うけど、同じ言語が割り込んできた。

「あら？元々私達の種族は、夫婦という感覚はないもの。

子孫が残すことが出来るのなら、誰でもいいもの。同じ種族の男性は、食べられるのが嫌で

発情期にならないと現れないし。こっちの娘がいい？

どうラーテイ？」

「うえ、結構だよ」

どうやら、3年前にも習性を知らなくて、騙されるところだったらしい。

「どうやって、分かって逃げたの？」

「今日みたいに、イカ女が連れてきて、その時にイカ男もタコ女と

話が出た。

だから急いで逃げた」

個室の部屋へ逃げたらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9453x/>

ペットな私と宇宙のヒトたち（仮）

2011年12月30日01時51分発行